

20号に寄せて

原野 昇

2001年9月11日ニューヨーク、ワシントンを中心に米国を襲った同時多発テロは世界中の人々を震撼させた。フランス文学を中心に、人間の言語表象活動の根本は何か、文学的営為とはいかなる衝動に裏打ちされたものかを問い続け、日頃教室内外で世界の文化やその多様性を口にしてきたわれわれにとっても、その衝撃は大きかった。一点の疑いもなくそれは人間のなしたことだという事実をもって、ともすればわれわれをひるませ、知的探究の営みを放棄させかねないほどのものであった。しかしわれわれはフランス文学を通して、アルピジョワ十字軍の際、ベジエ、カルカソンヌ、その他の南仏の町で、聖バルテルミーの夜、パリおよびその他の町で、フランス大革命後の恐怖政治において、アウシュヴィッツにおいて、負の方向において、いかなることまで人間がなしたかを、無数に直視させられてきたのではなかっただろうか。

この年、本誌が20号を迎えた。巻末に1号から20号までの総目次が掲載されている。そこにはいわゆる派手さはないかも知れないが、これを1行1行見ていくと、会員ひとりひとりの表出を通して、本会の1982年以来20年にわたる地道な歩みをたどることができる。

創刊号のあとがきと第10号の巻頭において、本会の創設者、杉山毅教授が指摘されているような、研究者を取り巻く社会状況は、今日にいたっても改善されていないどころか、国立大学の独立行政法人化問題に象徴的に表れているように、ますます厳しくなっていると見えよう。しかしフランス文学に関心を持ち、それとの関わりにこそ意義を見出す会員の熱意によって、本誌が、来るべき新たな10年に向かって、一步一步着実な歩みを進めていくことを信じて疑わない。